

7	西春	北名古屋市立栗島小学校	オオ 大	サキ 崎	タカ 堯	エ 絵
分科会番号	8	分科会名	音楽教育			

音楽のよさを感じ取り、主体的に表現活動に取り組む児童の育成
— 表現の工夫を考える活動を通して —

1 主題設定の理由

新しい教育課程における音楽科の目標の一つに、「音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする」とある。このことから、どのように表現するかについて思いや意図をもったり、音楽のよさや面白さを見出しながら曲を聴き深めたりすることが大切であると言える。しかし、本学級の児童（4年生男子9人、女子16人、計25人）の様子を見てみると、歌ったり楽器を演奏したりする際に、楽譜の音程通りに演奏することはできても、音楽のよさを感じ取り、「こんな風に演奏したい」という思いや意図をもって主体的に表現活動に取り組んでいる児童は、少ないように感じる。3年時にアンケートを実施したところ、「歌うことが好きですか」という問いに対して83%の児童が「好き」と答えたのに対し、「曲のよいところを見つけることができますか」という問いに対して「できる」と答えた児童は46%、「どんな風に演奏したいか考えることができますか」という問いに対して「できる」と答えた児童は54%にとどまった（資料1）。このことから、歌うことは好きでも、曲のよさを見つめたり、どんな風に演奏したいかを考えたりするところまでは至っていない児童が多いということがわかった。

【資料1 事前アンケート】



思いや意図をもって表現活動に取り組むためには、音楽のよさを感じ取ることと、そのよさを表現するための方法を知ることが必要である。さらに、音楽のよさを感じ取るには、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点でとらえることが重要だ。このことから、音楽のよさを音楽の要素と結びつけて考える活動を行うことで、音楽のよさを具体的に言葉で表現することができるようになると思う。そして、そのよさを表現するためにはどのように演奏したらよいのかを、具体的にイメージすることができるようになるだろう。また、ICT機器を活用して自分の歌声を録音し、振り返ることで、より表現したい歌声や音色に近づけることができるだろう。

そこで本研究では、歌唱教材を用いた授業を通して、ただ演奏するだけでなく、思いや意図をもって、主体的に表現活動に取り組むことができる児童を育てたいと考えた。

2 研究の仮説

主体的に表現活動に取り組む児童とは、自分から音や音楽にかかわり、自分の思いや

意図をもって表現活動を楽しむ児童のことをいう。

【仮説 1】

新しい曲に出会うたびに、その曲のよさを音楽の要素と結びつけて考える活動を行えば、曲のよさを言葉で表現できるようになり、どのように表現したいかを具体的にイメージできるようになるだろう。

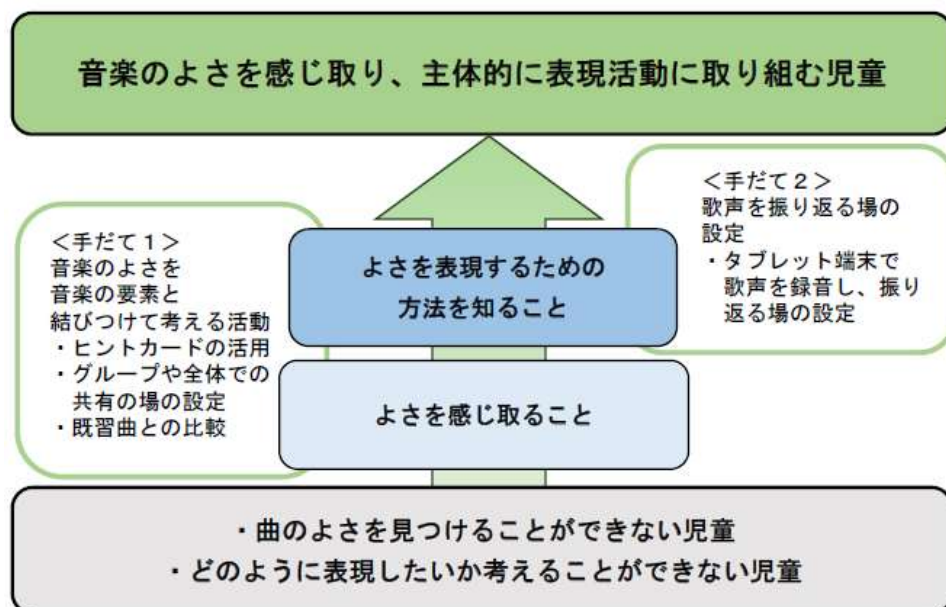
【仮説 2】

ICT機器を活用して、表現したい歌声になっているかどうか確かめることで、思いや意図に合った歌声に近づけることができるようになるだろう。

3 研究の手だて

対象の楽曲	手だて 1 曲のよさを音楽の要素と結びつける	手だて 2 歌声を振り返る場の設定
『春の小川』	<ul style="list-style-type: none"> 「音楽を表すいろいろな言葉」のカード（ヒントカード）の活用 全体での共有 	
『茶つみ』	<ul style="list-style-type: none"> ヒントカードの活用 全体での共有 	<ul style="list-style-type: none"> タブレット端末で歌声を録音し、振り返る場の設定
『この山光る』	<ul style="list-style-type: none"> ヒントカードの活用 全体での共有 	<ul style="list-style-type: none"> 録音した歌声の振り返り
『うさぎ』	<ul style="list-style-type: none"> ヒントカードの活用 全体での共有 既習曲との比較 	<ul style="list-style-type: none"> 録音した歌声の振り返り
『エーデルワイス』	<ul style="list-style-type: none"> ヒントカードの活用 グループや全体での共有 	
『まきばの朝』	<ul style="list-style-type: none"> ヒントカードの活用 グループや全体での共有 	<ul style="list-style-type: none"> 録音した歌声の振り返り

4 研究構想図



5 抽出児童

授業の様子と意識調査の結果から、2人の児童を抽出した。

児童 A	<ul style="list-style-type: none"> 歌うことは、どちらかといえば苦手 曲のよさを見つけることも、どんな風に演奏したいか考えることも、苦手
児童 B	<ul style="list-style-type: none"> 歌うことは、好き 曲のよさを見つけることも、どんな風に演奏したいか考えることも、苦手

6 研究の実際

(1) 『春の小川』

『春の小川』のよさを表現する際、どのように書こうか迷っている児童が多かったため、教科書の巻末資料の「音楽を表すいろいろな言葉」（資料2）や、音楽ワークの巻末資料の「どんな言葉であらわそうかな」（資料3）を参考にするよう、声かけをした。すると、「やさしい」「なめらかな感じ」「静かに流れている感じ」「あたたかい」「お散歩している感じ」といった表現が出てきた。大半の児童が、曲に対するイメージはもっているものの、それを言葉で表すとすると、難しく感じているようであった。まずは選択肢を与え、その中で自分のイメージに合うものを選ぶというところから始めたことで、児童の中での「曲のよさを言葉で表現する」ということの難易度を少し下げることができた。

曲のよさを言葉で表現させた後、そのよさを表現するためには、どのように歌うとよいのかを考えさせた。すると、児童Aは「やさしい感じ」を表現するために「なめらかな声で明るく」と書いており、児童Bは「なめらかな感じ」を表現するために「高い声で」と書いていた。児童Aは、音色と結びつけて考えているが、児童Bは、音の高さと結びつけている。なめらかな声は音の高さのみでは表現できないため、「高い（低い）音の部分をどのように歌うといいかな」のように声をかけることで、もう一度考えさせ、音楽の要素と結びつけられるようにした。すると、「高い音のところをやさしく歌う」と書き直しており、音色とも結びつけることができた。

(2) 『茶つみ』

『茶つみ』を学習する際には、ヒントカード（資料2・3）の活用により、多くの児童が曲のよさを言葉で表現できるようになった。また、表現方法を考える際には、「やわらかい感じ」を表現するために「やさしい声で」と、曲のよさを音楽の要素と結びつけられている児童もいた。

さらに、自分の歌声が表現したい歌声になっているか確認させるため、タブレット端末の中のロイロノート・スクール（株式会社LoiLo、以下「ロイロノート」と表記）を使用して児童の歌声を録音させ、振り返りの場を設定すると、楽譜の音程通り歌うことができていた児童は、自分が表現したい歌声に近づけようと歌い方を工夫することができた。しかし、児童A・Bを含め、まず楽譜の音程通りに歌うことができていない児童は、歌うことで精一杯だった。このことから、思いや意図をもって、主体的に表現活動に取り組むためには、十分な練習時間を設定し、ある程度歌い慣れておくことが必要であると感じた。

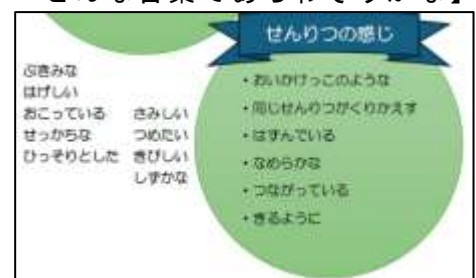
(3) 『この山光る』

この楽曲を聴いた際には、選択肢の中から曲にふさわしい表現を見つけ、自分の言葉を加えながら曲のよさを表すことができたようになった児童が増えた。十分に練習し歌い

【資料2 教科書巻末資料
音楽を表すいろいろな言葉】

音楽の感じを表す言葉のれい			
楽しい	明るい	元気な	かろやかな
悲しい	暗い	しずかな	おどけた
はげしい	いさましい	はく力のある	はなやかな
やさしい	さびしい	かわいらしい	なめらかな
つづく	落ち着く	終わる	など

【資料3 ワーク巻末資料
どんな言葉であらわそうかな】



慣れてきた頃に、歌声を録音させ、振り返りの場を設定した。まず、**ア**の旋律（8分音符が多く、リズムが細かい部分）と、**イ・ウ**の旋律（4分音符や2分音符が多く、ゆったりとしている部分）の楽譜を添付したワークシートをロイロノート上で作成し、曲のよさを表現するためにはどのように歌いたいかを記入させ（資料4）、そのワークシート上に歌声を録音させた。自分の記入した歌声の工夫を見ながら録音することで、より意識しながら歌うことができているように感じた。

【資料4 『この山光る』をどのように歌いたいか】

	ア の部分	イ・ウ の部分
児童A	・きれいな声	・落ち着いた声
児童B	・元気よく歌う	・ちょっと元気よく歌う
その他の児童	・いそいでいるような感じ ・ひびくような声で歌いたい ・元気に明るく歌いたい ・リズムよく	・ゆったりとゆっくり ・おだやかにていねいに、声は高く ・なめらかでやわらかい感じ ・ゆっくりやさしくきれいに

『この山光る』の**ア**の部分と**イ・ウ**の部分それぞれ録音した後、すぐに自分の歌声を聴き、表現したい歌声になっているかどうかを確認させた（写真1）。自分の歌声を録音して聴いてみると、自分がイメージしていた歌声と違っていると感じる児童が多かった。

そこで、表現したい歌声に近づけるにはどうしたらよいか、もう一度考えさせ、録音する活動を繰り返し行っていた。すると、自分なりに歌い方に工夫を加えて試しながら、歌声を自分のイメージに近づけようと取り組む姿が多く見られた。しかし、児童の録音した歌声を提出させて確認してみると、1回目の録音と2回目・3回目の録音と、あまり歌声に変化のない児童も多くいたため、前回録音した歌声とどんなところを変えたのかを、言葉で書かせるようにした（資料5）。書かせることで、どのような歌声に近づけていきたいのかが明確になり、録音する際にも、より意識して歌うことができていたように感じた。



【写真1 歌声を振り返る様子】

【資料5 前回の歌声と変えたところ】

	どのように歌いたいか	前回録音した歌声と変えたところ
児童A	・きれいな声	・声をもっとなめらかにした
児童B	・元気よく歌う	・前より、もっと元気よく歌った 軽やかな声にした
その他の児童	・ひびくような声で歌いたい ・元気に明るく歌いたい ・リズムよく	・長くひびくように、はずむように ・もうちょっと大きくした ・楽しい気分で歌った ・はきはきと元気よく歌った

児童Aは、歌うことを「どちらかといえば苦手」と答えていたが、録音する活動には意欲的に取り組み、自分の歌声を集中して聴きながら振り返る姿があった。児童Bも、録音して歌声を振り返る活動に意欲的に取り組み、自分の記入した歌い方の工夫を声で表現しようとする姿があった。

(4) 『うさぎ』

この楽曲は、短調の楽曲である。既習曲がほとんど長調であるため、児童は範唱を聴

いてすぐに雰囲気の違いに気付いたようだった。短調・長調については未習なので、ピアノで短調の楽曲と長調の楽曲をいくつか弾いて聴かせ、短調だと暗い感じ、長調だと明るい感じになるという感覚をつかませた。その後、「短調」という特徴がどのようなよさに結びつくか児童に考えさせたところ、「かなしい感じ」「静かな感じ」「さみしい感じ」「落ち着く感じ」という意見が出てきた。「短調」以外の特徴を考えさせると、「強弱がだんだん弱くなっていく」「速さがゆっくり」「リズムがゆったり」という意見が出てきた。全体でさまざまな意見を出し合ったことで、「短調＝暗い」とは限らず、「強弱」「速さ」「リズム」といったいろんな要素がかかわり合って楽曲のよさを作り出していることがわかったのではないかと思う。歌声を録音し振り返る際にも、そのよさを表現できるようにだんだん弱く歌ってみたり、ゆったりとしたリズムを生かして歌ったり、かなしい感じを声で表現しようとしたりする姿がみられた。

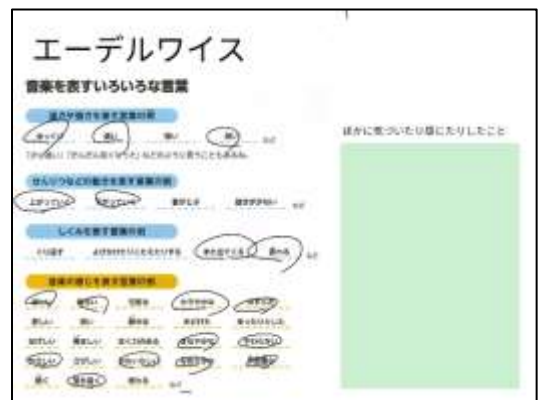
(5) 『エーデルワイス』

4年生の学習では、記述に時間がかかる児童や、書くことに抵抗がある児童が積極的に取り組めるように、選択と記述の両方ができるカードを作成した。実際に、記述形式だとまったく書けなかった児童が、気付いたよさに丸を付けることができた。さらに、グループで共有する際には、互いの共通点や相違点を見つけやすくなり、人によって感じ方がさまざまであることに気付いたり、自分では見つけられなかったよさに気付いたりすることができるようになった。『エーデルワイス』でも多くのよさに気付くことができ、児童Aも児童Bも多くの言葉に丸をつけることができていた(資料6・7)。また、今回ロイロノートで配付したワークシートには、よさにあたるものと特徴(音楽の要素)にあたるものの両方が載っていたため、よさと音楽の要素を結びつける活動にもつながった。歌うときやリコーダーで演奏するときにも、そのよさや特徴を表現しようとする様子がみられた。

【資料6 児童Aのカード】



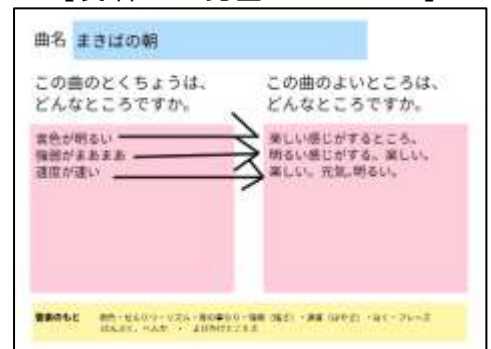
【資料7 児童Bのカード】



(6) 『まきばの朝』

この楽曲では、楽曲のよさと音楽の要素を結びつけるワークシートに追加で取り組ませ(資料8)、そのワークシートをもとに、表現方法を考えさせた。児童Aは「なめらかに、明るい声で歌いたい」、児童Bは、「明るい声で、元気よく、朝の様子が思い浮かぶように歌いたい」と書いていた。表現方法を書き込んだワークシートにロイロノート上で歌声を録音させ、振り返り際には、新しい言葉を書き加えてもよいことを伝えると、児童Bは自分の歌声を振り返りながら、「言葉をはっきりと」と書き加えていた。

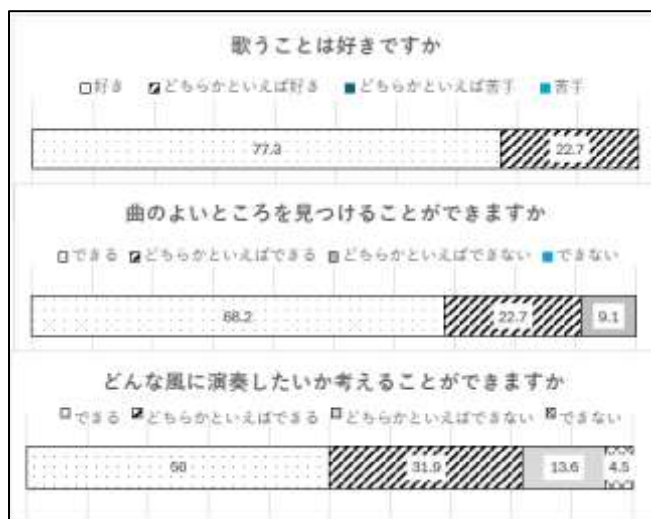
【資料8 児童Bのカード】



7 研究の成果

曲のよさを言語化させ、そのよさを表現するためにはどのように歌うとよいかを考えさせたことで、曲のよさを音楽の要素と結びつけて考えることができる児童が少しずつ増えてきた。言葉選びに迷っている児童も、ヒントカードを活用することで、ほとんどの児童が言語化することができていた。実践を通して、児童の音楽を表現する語彙の幅も広がったように感じた。事前アンケートと事後アンケート（資料9）を比較すると、「曲のよ

【資料9 事後アンケート】



いとところを見つけることができますか」という問いに対して「できる」と答えた児童は22.3%増え、68.2%になった。また、「できない」と答えた児童は0%になった。「どんな風に演奏したいか考えることができますか」という問いに対しては、児童の答えにあまり変化はなかったが、曲のよさを見つけられるようになったことは今後、思いや意図をもって表現活動に取り組むことにつながっていくと思う。このことから、手だて1は有効であったと考える。また、タブレット端末を用いて歌声を録音し振り返る活動では、自分の歌声をじっくり振り返ることで、自分のイメージする歌声と実際の歌声との違いに気付かせることができた。さらに、ほとんどの児童が自分の表現したい歌声に近づけようと意欲的に取り組むことができた。アンケート結果からは、「歌うことは好きですか」という問いに対してすべての児童が「好き」「どちらかといえば好き」と答えており、歌うことに苦手意識のあった児童も今回の実践を通して前向きに取り組むことができるようになったといえる。このことから、手だて2は有効であったと考える。

児童Aは歌うことが「どちらかといえば苦手」から「どちらかといえば好き」に、曲のよいところを見つけることが「できない」から「できる」に変わっていた。児童Bは、歌うことはもともと好きであり、曲のよいところを見つけることが「できない」から「どちらかといえばできる」に変わっていた。実際にどちらの児童も、初めは曲のよさが書けなかったり、よさと音楽の要素を結びつけることができなかつたりしたが、実践後にはどのように表現したいかを複数の言葉で書くことができるようになった。

このことから、今回の実践で、児童は思いや意図をもって主体的に表現活動に取り組むことができたといえる。

8 今後の課題

さまざまな楽曲に触れる際に、その音楽を形づくっている要素とその働きについてグループや全体で共有する場を増やしたことで、児童一人ひとりの音楽の要素に対する理解は深まったが、それを言葉で表現できたとしても、自分の歌声で表現できる児童はまだまだ少ない。今後も楽曲のよさと音楽の要素を結びつける活動を継続するとともに、「音楽のよさを表現するための方法を知ること」についてもっと具体的に取り組んでいかなければならない。児童がより自分の思いや意図に合った歌声で歌うことができるよう、働きかけていきたい。